

## 異文化相互理解の動態的プロセス

——日本社会の文化分析のための外側からの視点——

吉田 光宏

### 序

文化人類学は、「他者」理解のための様々な視点や理論を探る学問である。その根本的なものの視点の一つに、文化を異にする社会との比較を通じて、相手／他者の理解、ひいては、自分の文化の理解を試みようとするものがある。文化人類学的視点による日本文化の検証においても、「外側」の視点がその描写や説明の「客観性」を求める有効な視点となってきた。つまり、それは日本人が気付かないものを「外部」の目によって、発見することができるといってものである。ルース・ベネディクトは戦後、日本文化を分析する前提として、誰もが文化としての「レンズ」を持っていると述べた(1948)。ある文化の「レンズ」あるいは認識の仕方を説明する際、「外部」の人こそ、これを「客観的」に解析できるとベネディクトは主張した。彼女はここで、人間の行動を説明する際、自然科学のモデルを適用している。つまり、眼鏡を作ってもらったときに必ず専門の眼医者が「客観的」に視力を測定し、その人にあつた眼鏡の処方せんが必要である。実際、この視力は我々が測定できるはずもないのである。「文化」もちょうど、こうした、「暗黙

## 異文化相互理解の動態的プロセス

の了解」であり、「無意識」のうちに「共有」されているのである。その社会の誰もが、この「レンズ」をもち、異なる社会の人々はそれぞれ異なる人生観、焦点の捉え方、視点の取り方をする。したがって、異なる「外部者」こそ、このレンズの特徴を特定できる。その社会の人にとっては、自らの眼鏡の特徴を意識することは困難である。ベネディクトはこうして、自然科学の「局外者の客観性」を文化人類学に適用し、自らの研究の立場を正当化させ、日本の社会を説明していった。彼女の日本の文化人類学的研究の功績には大きいものがあつたと言うべきであろう（青木1990）。この外側の視点からその社会のあり方を浮きぼりにしていくというアプローチも、基本的な部分では、今日の文化人類学的理解に存続していると言ってよいかもしれない。たしかに、ある社会の「文化」を研究するにあたり、なんらかの形で、その文化のことをよく知らないという「外部者」性や「他者性」が、研究者には求められる（Ohnuki-Tierney 1984）。これがフィールドワーカーの出発点である。実際にその社会の「内部者」のインフォマント達には、フィールドワーカーに対してそうした認識をしてもらい、研究に協力をしてもらう。ここで前提となつている「内部者」と「外部者」をわける規準とは、国籍や「生まれ」などとして、あらかじめ付与されている本質的なものである。

だが、はたして、この自然科学の「客観的」な視点が、人間の文化や行動を理解するために、正当な絶対的なものとしてよいのであろうか。また、フィールドワーカーの「他者性」とは、例えばこの国籍というような、その人に付与された本質的なものとして存在するものなのであろうか。そして、ベネディクトが述べるように、同じ「レンズ」を持つていとされる同じ社会の人々は、その自らの「レンズ」の特質を探るのが困難なのであろうか。つまり、ベネディクトの見方では、日本人による日本社会の研究は、限界があることになるが、果たして、そうなのだろうか。そうした所謂「内部者」による内部者の研究はどのような根本的立場に立脚しているものなのだろうか。

この論考では、まず、この「客観性」を主張する「外部者」の在り方の理論的問題点の検証を行い、次ぎに、自分とは文化差のあるものと遭遇し「違和感」を感じたところに、相互理解の糸口があることを検証する。最後に、こうした議論を踏まえ「外部者」性がいかに文化的に形成されていくかを論じていく。この「外部者」性や「他者」性を

形成するファクターとは、国境や民族など本質的なものとしてあらかじめ付与された静止したものではなく、「自分」と「他者」との間に繰り広げられるという、動態的に構築されていくものであり、それぞれのもつ「文化」の特色を反映させながら無限に形成されていくものであるということ論ずる。

### 「客観的」眼差しの政治性

ベネディクトのような「外国の人類学者 (foreign anthropologist)」は「外部」者だからこそ「客観的」視点を持ち説明が可能であるとしたが、「この人の視点が客観的である」と言ったときに、附随する権威とは、実は、欧米中心的文化構築物であることが指摘されてきている (Bleier 1984; Keller 1985; Lock & Sheper-Hughes 1987; Martin 1992; Schiebinger 1989; A. Strathern 1997)。この「客観的」理解とは、ヨーロッパ啓蒙期に生まれ発達した「科学」という思考方法と密接に絡むものである。この「主観性／客観性」という二項対立的思考方法には、十七世紀のデカルトの視点が投影されている。「我思う故に我あり (Cogito, ergo sum)」。この言葉で示された彼の思想は、科学、医学、社会科学に大きな影響を与えた。彼は、人間を理解するために、「精神／身体」という二項対立の概念を取り入れ、科学とは、身体のメカニズムの分析が目的であると言う。「精神」とは、物的な存在でなく、思考する能力として存在する。これに対して、「身体」とは、物的なものであるが、思考する能力はない。「物」として存在する「身体」は、例えば物理学や数学の法則のように、時間や空間を超越するルールや規則によって、そのメカニズムが解析される。こうした物的なもの、また観察可能なものこそ科学の探究の対象となる。つまり、「身体」という物的なもの——たとえば、人間の身体——を機能させるメカニズムを解明するのである。こうして、「精神」と「身体」との分離によって、医学や生物学などに代表される自然科学が発達していった。一方で、その眼差しは、人間行動を探究する社会科学にも向けられた。

アンドリュー・ストラザン は次ぎのように言う (A. Strathern 1997)。「客観性／主観性」という概念は、「普遍的」

異文化相互理解の動態的プロセス

なものであるどころか、西洋の歴史の中で生まれてきた西洋の「文化システム」の中に「埋め込まれた」ものである。「客観性／主観性」という概念は医療の分野や社会科学の分野の根幹をなし、絶えず前者に権威や正当性が与えられてきた。科学的知識とは迷信や感情という曖昧なものから解放されたものであるという意味がこめられ、「普遍的な法則性」が我々の意識とは別のところで作用しており、隠されている、とする。高度の医学の知識を持った外科医と、その前に横たわる麻酔をかけられ手術を施されていく患者の姿を思い起こせば、この図式は明らかになる。患者ではなくこの専門医が病気の原因を認識しており、患者は受動的に治療を待ちうける存在である。この外科医にとって、患者による説明は「主観的」な「苦情 (complaint)」であり患者自身で病因を特定することは出来ない。自らを語ることの出来ない、治療方法の発見を受動的に待つという医師に支配されている「他者」である。医療機器などに現れる数字などがその病因を探る「客観的」なデータで「兆候 (real sign)」である。

この「客観的」な医師の患者への「眼差し」と同じ前提で、ベネディクトは日本人のインフォーマントに対して「あなたのことは私が客観的に把握することができるとし、自らの研究の正当性を見出し出すとしていた。そこには、ローカルな思考の一形態である、欧米的思考が投影されている (Giddens 1990)。このような、自然科学における「外部者による視点」のモデルをそのまま、ある社会で生きていく人々の文化の理解にあてはめようとするとき、欧米的な見方によって理解することとなりかねない。こうした視点で、日本を理解できると想定するところには当然少なからず限界がある。

この西洋の文化システムに埋め込まれた「眼差し」はさらに「言説」として、メディアを通して再生産されていく。この「眼差し」は、ともすれば、日本人像の極端な偏見やステレオタイプを増幅させているのである。「ライジングサン」という小説は、ベストセラー作家として日本でも著名なマイケル・クライトンによって書かれた (Crichton 1992)。この小説は、在米日系企業を舞台に白人女性の殺人事件をあつかったもので、映画化もされた。また、文化人類学の視点から捉えた日本社会の入門書の推薦図書のリストにも掲載されている (Hendry 1998)。この原作者、クライトンは、アメリカの大学の日本を扱う文化人類学の授業では、おそらく必ず紹介されるドリーン・コンドーによる東京の

下町の和菓子のエスノグラフィーにも目を通してゐる (Kondo 1990)。彼は、ハーバード大学で医学のみならず人類学も学び、ケンブリッジ大学で教えた経歴をも持っている。クライトンの知識をもってメディアに投影された日本人は、日本の事情通とされた者によってのみ、説明されていく。ここでは、例えば日本人が相手との立場によって態度を変化させる行動をみて、日本人にはアメリカ人が尊重する固定された個人というものが存在しない、自我が存在せず、「とんでもないうそつき」と描写される。その姿は、ある時は金銭的に貪欲極まりなく、一見丁寧だが暴力的であり、極めて好色、影で暗躍し、売春宿などを経営する。こうして、日本人は、不可解で神秘的であり、また一方ではアメリカ社会に脅かしをかけていく存在として描写される<sup>1)</sup>。

こうしたメディアの在り方を批判したドリーン・コンドー自身、実際に、この姿を、単に娯楽映画の中でのものとして片付けてしまつては決していけないのだと述べ、この姿には偏見だけでなく、オリエンタリズム的視点、欧米文化を礼讃する様々なポリテイカルな要素があり、反論していかなくてはいけないのだ、と後の著書で述べている (Kondo 1997)。それにしても、何故、こうしたものが一般のアメリカの観衆を引き付け、その描写や説明が説得力を持つてしまうのであろうか。ここで登場する日本の専門家とされている人物は、感情を表には表さないキャラクターであるが、これは、欧米的な文化的視点では、知性と権威を保持する資質を持った人物である (Lutz 1988)。さらに、この日本の事情通の役を演ずる彼の眼差しとは、まさに、自然科学の領域での「客観的」科学者や研究者の眼差しと類似する (Kondo *ibid.*)。また、原作者の巧みな知識の流用にも同じような図式があてはまる。つまり、国境の異なる「外部者」こそ「異文化」を「客観的」に語れる、あるいは、こうした意味での「外部者」こそ自明のこととしているものを「科学的」に見出し説明できるといふ一般視聴者の西洋中心的前提に働きかけてくるのではないだろうか。

実際に、こうしたステレオタイプは、メディア上でのものではなく、日常にあふれている。一般にアメリカ人から見た自分達のイメージとは、日本人と比べて、自然な人間性をもつ存在、文化的存在で、仕事以外の余暇も楽しめ、人間らしい心の余裕があり、正直かつ穏やかである。これに対して、アメリカ人にとっての日本人とは、仕事中毒、物欲に専心し、人間らしい心の余裕がなく、ずる賢いというステレオタイプである。こうしたネガティブなイメージ

## 異文化相互理解の動態的プロセス

のみ先行してしまい、日本人とみると、こうした相手であると決めつけて嫌う場合が珍しくない。このようなエスノセントリズム（自民族中心主義）的眼差しを感じ取り、在米日本人駐在員などから、こうした差別的待遇を受け、不愉快な思いをしたという話がよく聞かれる。

こうしたステレオタイプの見方には以下のような根本的誤謬が存在する。なによりも先ず、このステレオタイプを作る単純な二項対立的思考によって、絶えず、その存在に疑問符を与えられているのは、日本の社会である。「ずる賢い」、「奇妙」、「嘘つき」といった感情は同時に、そうした捉え方をしている人の社会のあり方を正当化させている。どうしても、異質なものを見た場合、否定的眼差しを投げかけてしまうのだが、こうした見方には、意図的な場合であるにせよそうでない場合にせよ、そこには、ポリテイカルな問題点がある。つまり、自分の社会が本来の姿で優位にあり、相手社会、ここでは日本の社会を劣位に置こうとする、いわゆるエスノセントリズムがその根底にある。自分の社会とは、異質なものを見出し、自らの文化のあり方を正当化させる、ポリテイカルな要素、つまり、自文化と異文化との間に、上下関係を形成させている。ここでは、異文化である日本へ向けられる様々な「外部」の視点は、その視点を持っている人の文化の優位性を形成しようとする意図がある。外部の視点の文化とは異質な日本の社会の文化のあり方や習慣を目の当たりにして、当惑したところに、すべりこんでくる感情である。異質なものに、好きか嫌いかという感情だけでなく、実は、自らの道徳や価値観が正しいものであるという確認作業を行おうとしているのである。

フィードラーはこうしたエスノセントリックな捉え方を批判的に認識し、文化人類学的に日本文化を日本人女性の視点から記述している (Fiedler 1996a, b)。日本人女性の出産のあり方から日本の社会のジェンダーや家族のあり方を研究した彼女は、日本人女性の出産は、一般のアメリカ人の視点から捉えてしまった場合、非常に疑問点が多いものに写ると指摘する。アメリカの場合、子供を出産する際、妊婦はその痛みや苦痛を声をあげて表現をし、いかに苦しみを言葉に発する。こうした痛いという感情を実際に声にすることによって、本人にかかるストレスをやわらげることができ、後の体力回復にも役立つと考えている。これに対して、日本の女性の出産は、痛みを、アメリカ人の女

性ほど声に表現せず、我慢をする。ここで、日本人女性は抑圧的、従属的、自己犠牲的とみなされる一方、アメリカ女性は自然で、合理的であると捉え、こうしないと、日本人女性の場合、精神的な加重負担がかかり、心理的ストレスを体内にためこんでしまうのではないかと見る。この見方は、十九世紀に西洋社会が非西洋社会に対する眼差し、すなわちエスノセントリズムの視点である。つまり、日本人のお産の仕方に見られる産婦の行動とは、欧米のそれと比較して、まだ未発達の状態にあり、日本人は、欧米の習慣を見習うことによって、より優れたお産ができるようになるであろうとする前提がそこにある。こうして、アメリカ人の持つ認識の仕方とは正反対のものとして捉えられ、未発達状態にある否定的なものとして捉えられ、苦痛を言葉で表現できない寡黙な存在として捉えられる。

憧れの視線にせよ、否定的視線にせよ、こうした外部の視点とは、異質性を追究しようとする視点、本質的な「純粋文化への信仰」がある。つまり、グローバル化によって、諸社会の伝統的なローカルな文化は消され、世界は均質化していく傾向にあるとする認識がある (Clifford 1988)。「西洋」社会とは異質な文化、あるいは、「失われゆく伝統的文化」こそ探るものとして真正な価値があるとする視点である。この真正さをもとめる「文化」へのアプローチとは、「客観的」なものではなく、対象社会の伝統的文化を保存しようとする「主観的」目的を持つ「言説」を展開してきている。極端な例では、現代の日本人の社会のあり方を理解するのに、「外部」の人が「日本」のイメージとして「ゲイシャ」「キモノ」「スシ」などが会話などに出てくる。所謂「伝統的」と見られる領域に脈々と受け継がれる文化がそこにあることを認める一方で、実際、日本人と「外側」の人々との接触では、こうしたものによる知識だけでは、どの程度日本人の理解に有効なのだろうか。このような相手の興味本位のみでの説明によって、あるいは、「エキゾチック」なもののみを浮きぼりにして、異文化理解が可能になるのだろうか。そうではないことは異文化あるいは他者の理解に苦悶した人なら誰もが経験しているところである。異文化間の相互理解のための日本社会や文化の説明は、こうしたもののレベルの説明では十分とは言えない。<sup>(2)</sup>

これまで検証してきたように、「客観性／主観性」という二項対立的な思考自体が西洋的なものであり、そこにはヨーロッパの啓蒙主義時代に遡る見方が反映されていた。人間の「文化」を検証するにあたり、この概念自体、疑問視

## 異文化相互理解の動態的プロセス

しなくてはならない。また、そこには「主観的」なインフォーマントは、「客観的」な研究者によって発見され説明されるのだという前提も存在する。こうした視点は、確かに医学などの自然科学の領域の発達に貢献してきたが、それを人間の文化の研究に当てはめてよいのだろうか。もし、文化人類学者がこうした西洋中心的な見方を自明のものとしていけば、「文化」を西洋中心的に再構築しているかもしれないのである。こうした概念自体、不問とされてはならないものである。ここには、西洋中心的な視点が存在しており、こうした「眼差し」は「言説」としてオリエンタリズム的な知識に結びつきかねない (Said 1978)。さらに、一般のメディアを通して様々なステレオタイプや曲げられた異文化像が増幅されていっているのである。

## 理解のための相互主観的対話のありかた

「外側」の視点自体が「文化的な構築物」であり、その外部の眼差しには、その「外部者」自身の社会背景や歴史や世界観が投影されているということとは、言い換えれば、「客観的」とされる「外側」の視点との遭遇とは「相互主観的」なものとなってくるといふことである (Rabinow 1974; Schultz & Lavenda 1995)。ここで、異文化の間での「主観」的な見方とはどのようなものか。先のベネディクトの概念である文化のレンズを検討したい。ベネディクトの師でもある、アメリカの人類学の創始者であるフランツ・ボアズ (1889) によれば、「新しい知覚は、我々の知識の一部を構成するすでに慣れ親しんだ知覚として構成される」としている。外界の現象は、無媒介に我々の知識として捉えられるのではなく、われわれが成長過程において習得した知識の枠組において、つまり、文化のフィルターを通して我々の知覚に到達する。人間の器官の反応の仕方、作用の仕方は、文化が作り出したものである。我々は、この文化のフィルターを通して、自分の経験の意味付けをしている。彼は、人間は、生まれながらにして身につけている知覚、普遍的なカテゴリーを通して外界を知覚し、思考することができ、経験以前に、こうした思考方法を持つという、普遍的な人間の思考を受け入れる。また一方で、ヘルダーやロックのように人間の理性は成長の過程において少しずつ



作り上げられていくものとする認識の仕方、つまり、経験によって、思考様式を形成していくという考えも受け入れ、個人の置かれた社会環境が、知覚の決定要因であるとも考えた。ボアズは、この二つの考えを融合させ、文化間の差異を説明する。人間は、普遍的な知覚のカテゴリーを通して、外界を認識するが、その知覚のカテゴリー自体は、人間が各社会の中で歴史的につくりあげたものであり、人為的な環境を習得することによって、人間は特殊な個人として成長していく。こうして、ボアズは、ある社会が当然としてしている前提や物事の捉え方や価値判断とは、他の社会では通用するとは限らず、そうした「文化」の理解の仕方とは、その社会の見方によってのみ理解が可能であるという、文化相対主義的視点が必要不可欠であると主張した。この視点は、現代の文化人類学のメルクマールとなっており、異文化の理解の根本的な出発点である。<sup>3)</sup>

確かに、ある社会は、他の社会の価値観でその社会の価値観を理解するのは誤解を招くことになるのだが、実際、自分の文化とは異質の社会の習慣や行動に出会ったとき、どうしても、それぞれの社会で相対的に存在するべき、文化のフィルターによって、他の社会を嫌いであるとか、おかしいという風に感情的に捉えやすいのである。つまり、このように作り上げられたそれぞれの文化のフィルターを通して、他の社会の人々は、日本の社会や文化を、捉えているのである。

この主観的視点、あるいは、文化のフィルターのあり方を素直にうけとめ、異文化間の理解のプロセスである人類学的フィールドワークで少しずつ進む知的作業を分析したのが、アメリカの文化人類学者ポール・ラビノー (Rabinow 1974) である。彼は、インフォーマントとフィールドワーカーとの間に生じる摩擦や緊張とは、両方の文化の接触による、あらたな文化構築物であることを論じた。彼のモロッコでの調査経験の記述が物語るように、フィールドワークでの理解のプロセスは、「調査されている人」あるいはインフォーマントは実は、積極的にフィールドワーカーを、自分達の価値規範や評価基準の中にとりこみながら、試しているのである。フィールドワーカーに対して、意図的に質問に答えなかったり、あるいは、わざと協力しなかったりするところに、実は、そこに、相互の文化の駆け引きが隠れている。また、インフォーマントが自文化を語るときに、自分に内在する意識／無意識の世界を実感し、さらに

異文化相互理解の動的プロセス

それを言葉にする必要がある。つまり、自らが当然のこととする世界観を言語で説明するために、相応の技術が要求されていることを指摘する。つまり、フィールドワーカーが分りやすいように、インフォーマントは言葉で語らなくてはならず、そのためには、双方に緊張間やぎくしゃくした関係が生まれ、そこに時間と労力が要求されていくのである。

さらに、ここには、イギリスの社会人類学者ロドニー・ニーダム (Needham 1972) が分析するように、翻訳上の問題点が介在する。彼は、英語の *experience* や *belief* という言葉で表す概念をアフリカのヌア社会、メキシコのウイチョール社会、ボルネオのプナン社会、インドネシアのスンバ社会やスラウエシ社会などにおける似た概念を比較分析する。そこには、それぞれの社会において、その意味するものには食い違いがあることを指摘し、翻訳の難しさ、ひいては、異文化理解の困難さを説いている。

このフィールドワーカーとインフォーマントとの間の相互理解の困難な関係は、我々の日常の異文化接触の際にも当然あてはまる。例えば、アメリカの日系企業で働く一日本人ビジネスマンと現地の社会の人達あるいは彼もしくは彼女の仕事仲間というコンテクストに置き換えれば、当然、日本企業のやり方や自らの意志決定方法などを英語で理解させ、説明する作業には、絶えず、こうした問題点が内在していると言える。

また、ある概念を「言語」化するという作業自体にも、文化的なものが介在する。この点で、リブラ (Lebra 1996) による日本の文化のセルフ(自己)の構成要素の、アメリカの文化、モロッコの文化、ジャワの文化との比較研究は興味深い。日本人の場合、外面は、口や顔に代表されるのに対し、内面は、内蔵を連想させる「心」や「腹」におさまっている。例えば、「人は見かけによらぬもの」「腹に一物」「腹におさめる」「口先だけの人間」「言わぬが花」「口に蜜あり腹に剣有り」「顔で笑って心で泣いて」「口は以て食うべし、以て言うべからず」このような慣用句や諺に現れているのは、人間の二面性であり、内と外とを区別していることを表すだけでなく、「心」などの内面が「口」など外面に対する優位性を持っているということである。この点では、リブラも指摘するようにアメリカ文化におけるセルフのありかたと似ているとする。

だが、この感情の表現には、アメリカの場合、両義的でポリテイカルな文化的意味が内在する。ここでアメリカの文化人類学者であるキャサリン・ルッツ (1988) のミクロネシアとアメリカの社会における感情の文化分析を紹介したい。著者は、先に指摘した「精神／身体」の二項対立と密接にからむ世界観がアメリカに存在すると論じている。「精神」とは、「身体」を満たすものであり、感情もそのあり方の一例である。公の社会活動とは切り離されている感情は、社会関係の秩序というよりは、個人の内に秘めたものである。ここでは、感情は、私的で、その人に内在するものである。温もり、生命の源、あるいは力、個人のエネルギーと肯定的に捉えられる。一方、この感情が、社会的、公的コンテキストにおいて表現されると、否定的な意味がそこに生まれる。それは、コントロールを欠いている状態、弱い者としての状態、秩序を乱しかねない状態、仕事を適切にこなせない葛藤などを表す。この感情の否定的意味合いは、思考、合理性、知性という肯定的な意味合いを持つ概念と相反する。感情的になることは、情報を合理的に処理できにくい状態、知的作業を行にくい状態を意味する。一般に、「あの人は、感情的になる」という言葉の裏には、その人の発言の妥当性を疑問視している。日本語の場合、よく理詰めで物事を判断する人に対して「打算的」であるとするが、こうした見方とはやや異なっている。アメリカ社会の場合、二者択一で迷っている場合“*pros and cons*”というやり方のように日本人から見て打算的ともされるものでも、感情を介さないやり方に価値を置いている。むしろ、アメリカでは感情的な人間とは、非合理的な者として、見下される。こうした人間とは、とくにアメリカの場合、幼児、子供、黒人、女性であるとルッツは指摘している。このように感情という内面の概念は、絶えず言語による思考／合理性／理由といった外面の秩序を形成するカテゴリーと関連づけて捉えられる。理由とは、文化や社会構造など秩序だった体系を構築し維持していくものである。それにはたいして、感情とは、この理由とは相反するもの、脅威を与えるもの、あるいは下位に位置付けられるものと評価される。

こうした言語化に重きをおく欧米的な価値観と比べると、日本人の場合、言語だけでなく、相手の立場、立ち居振るまい、仕草などに意味を読み取ろうとする。そこで自他の間に情緒的な一体感を見い出す。先にあげた諺でもわかるように、口にだされたものにあまり価値を置かない場合もある。こうしたアメリカ人と日本人とで言語化に対する

## 異文化相互理解の動態的プロセス

認識の文化差を、日本で生まれて大学まで日本で育ったリブラは、アメリカでの違和感や当惑を感じたエピソードを紹介して、比較分析している (Lebra 1976)。ちょっとした仕草だけでなく、沈黙にもまた意味を見い出す。何を誰に語るか、何を誰に語らないのか、そうして、自分の思いを誰にどのように伝えるかを心得なくてはならない。また、日本人の間で、相手の気持ちを「察する」、「心が通じ合う」という表現に込められているように、ある思いを口に出して言葉で表現することは、メッセージを伝える一つ的手段にすぎない。

実際、言語による表現が唯一のものではないということを、また様々な社会で人々が実践を通じて意志や感情を表現していることを民族誌は教えてくれる。人は、様々な象徴的媒体で、メッセージを伝えている。例えば、筆者の調査した日本の群馬県北部の温泉地では「祭り」がその土地の社会変化の中で人々同士の葛藤しあう感情の衝突を表現する手段であった。その公の場で、普段言葉に出しては言えない思いを、そこで表現する。そこには、彼等の現在の不平等に対する不満、そうして、変化に対する強い希望が込められると同時に、その社会の階層的関係を強めるものでもあった (Yoshida 1997, 1999)。こうした声なき声を表現する文化は、何も、日本に限ったことではない。地中海沿岸に住むベドウィン社会の女性達の朗詠する詩 (Abu-Lughod 1986)、スーダン北部のイスラム社会における憑依儀礼やトランス現象 (Boddy 1989)、マレーシアの日系企業で働く現地的女性労働者による憑依現象 (Ong 1987) など、いずれも日頃言葉にだすことはあまり無いが、象徴的な「文化的に規定された方法」で自らを表現している。<sup>(4)</sup> また、そこには、人々の日常生活をとりまく階層的関係、その土地の微妙な政治的な関係、またグローバルに広がる社会的経済的変化がそこに凝集されており、そうしたものへの言葉にならない思いや政治的現状への反抗、人々のカウンター・ヘゲモニックな自己表現がある (Clifford 1986)。<sup>(5)</sup>

こうした言葉では現れないものの理解や象徴的なものを解きほぐしていく視点とは、くり返しになるが、客観的視点ではなく、「ズレ」や「違和感」を感じながら、問いかけをする、現地の人々と自分との絶えまない弁証法的過程による、相互主観的なものから生まれてくる。この実際に異文化間接触を体験した者は、土地の人々との関係に、翻弄されながら、その意味や現地の人々の世界観を解きほぐす。少しずつ異なる価値観のやりとりであるから、ラビノー

が回顧したように、そこには、「他者」理解のために、緊張、焦燥、戸惑い、嫌悪感といった所謂「違和感」が生まれる。

この「違和感」から、中根千枝(1967)はインドの社会での異なる集団のありかたを目の当たりにして、日本の社会の特徴を実感している。「違和感」を感じる所から、対象社会の理解のみならず、日本社会の理解をもたらしめると導いている。インドの集団の中の個人は外に開かれているのに対し、日本の場合、絶えず、ウチとソトとを区別する集団のありかたを指摘している。つまり、インドの場合、家族生活をするとき、個々の成員に行動のルールがある。その規則や考え方は、カーストが同じ場合、ほとんど変化ない。したがって、個人の家と関係する意志決定は、個人で行なえる。また、外から入ってきた成員である嫁には、その家の独特の考え方や習慣、所謂家風というものはなく、それにしぼられるということもあまりない。考え方もかなり、自分なりの意見を言える。インドから来た留学生の話を紹介し、何かの意志決定をするときに、日本の場合、何かと物事について所属集団の人と相談するということがこの留学生にとって「不思議」であったとしている。また、中根がインドにいったとき、日本では姑との関係で力関係に不利な立場にある嫁のはずが、喧々囂々と喧嘩をしあっているのを目の当たりにして、驚いたと記している。こうした外側との視点との遭遇から、この人類学者は、日本の社会の集団内部での重要な要素である、情緒的な一体感というものを、日本人は集団の内側で形成し、その中では行動や考え方を律する力が働いていると述べている。このように、外からの視点で、「不思議」とされたところや、同じ立場にあるものが異文化では違うように行動しているところに違和感を覚えているところから、自らの視点の分析を通じて、日本の社会を必ずしも否定的に捉えることなく、この人類学者の立場でそのあり方の一端を鋭く論じている。

また、私がアメリカの大学の大学院で学んでいたとき、当時、あくせく勉強する日本人院生に対して、日本人をよく知るインドネシア出身の院生はよく、"Don't be so Japanese"と言っていた。彼の"Japanese"とはどのような意味があるのか。私の回りの日本人院生によるその人への評判は、憎めず、親しみが持てるが、いつも人をお茶や昼食や夕食会に誘ったりしており、まともに勉強しているようには思えない者、あるいは、いつもぶらぶらして、やよいいかげんな人間という悪い評判もあった。こうした違和感同士のすれちがいは、インドネシアでの日本企業への現地の人

## 異文化相互理解の動態のプロセス

たちの否定的見方やインドネシア人の学者の日本人への印象もこうしたものと似通っている。つまり、インドネシア人からみた日本人の共通の印象が、「粗野」で個人の利益や立場や目的のみ追求するというものであった。日本人は押しが強すぎ、自分の立場ばかりを追い求めることに専念しすぎるといふものである。インドネシアの人間に対する価値基準では、こうした日本人がカサル (*Kasar*)、つまり、「がさつ」、「粗野」、あるいは「攻撃的」だと評価されがちである。このネガティブな概念は、「洗練された」、「優雅な」、あるいは「敏感な」という意味であるハルス (*halus*) という概念と対置の関係にある (*Geertz 1980*)。人との調和をはからず、自らの物欲に専念する姿はカサルなのである。一方、日本人は、インドネシアの人々に対して、「いい加減」で「頼りにならない」などと考える。このいい加減なジャワ人というイメージと粗雑な日本人の意味するものは何であろうか。

ギアーツ (*Geertz ibid*) によれば、ジャワ人はこの洗練されたという意味の *halus* の属性を外面と内面ともに大切に心掛けている。内面では、平静さや落ち着きを心掛け、外面では、人と人との間に調和と秩序を保つルールや礼儀作法を学ぶ。人と人との接触では、相手との調和を維持し、相手を傷つけないようにし、人間関係の和を重んじようとする。日本人もたしかに和を重んじるが、より、達成、目標、労働倫理に結びつく価値基準を重んじている。仕事のこと、かなりドライな関係が形成され、そこに、目標達成に専念する姿勢が問われる。こういう日本人がジャワ人に何か仕事を頼んだ場合、必然的に、その利益達成を期待している。一方、ジャワ人は、見かけでのハルス、つまり、人間関係を保ちたいために、「やりません、やりません」と言いながらも、いつまでたっても、やらなうということがおこる。そこで、日本人は、こういうインドネシア人に時としてドライに接し、厳しく当たってしまう傾向は日本にもあるが、ジャワでは、ルクン (*rukun*) という人間関係を重んじる考えがある。これは、できるだけ、対人関係で摩擦を避けようとし、個人の利益追求を避け、全員の利益を考えるようにするものである。個人の衝動や感情的な欲求をおさえ、全体の利益、社会関係の調和をはかろうとする。その集団の中に反対の意見やわだかまりのない状態をルクン (*rukun*) という<sup>6)</sup>。日本企業の利益は現地の人々に賃金労働を増やしたが、同時に、それは貧富

の格差を増大させてきており、日本の企業が大きく関係していると見られている。そうしたジャワの視点からすると、企業利益を追求する日本人の行動は、他の人々のことを考えない、粗野な存在である。

和を重んずるといふ点で、日本人と似ているにもかかわらず、日本人の仕事ぶりなどが、こうしたルクン (rukun) に反して、率直にものを言いすぎて、相手のことを考えていないと捉えられるのは、日本人の労働倫理にあるといつてよい。物事を達成すること、家業や仕事に専念し精を出すことへ価値観を見出すこと、勤勉であることを美德とし、禁欲や儉約に価値を見出す。こうした労働への文化的価値が明治期以前に既にあり、それが近代日本の経済発展の基礎となったとベラーは主張する (Bellah 1957)。また、そこに、商売を地位の向上と結び付けるといった仕事への倫理観が反映されている。こうした労働は、人間関係を難しくさせ、ギクシャクした関係になることで、集団内部での和が形成しにくくなる。このような、一連の労働や仕事に対する文化概念や、人と人との関係において価値のおき方の日本とジャワとの文化差が、互いの他に対する否定的な認識や両者のすれちがいに繋がっていると見える。相互のやりとりで、両者に生じたわだかまりなどの違和感には、こうした文化差が絡んでいるのである。

これまで見てきたように、ジャワ、インド、アメリカなどと通文化的比較によって、日本の社会の特徴が浮かび上がるが、ここで理解をもたらししてくれる切っ掛けとなっているのは、いずれも「ズレ」やそこに生じる「違和感」であった。文化フィルターを通して見てしまうことに基づく感情である。「異質」な文化との接触で、ストレスや不安がつきものだが、そうしたもろもろの感情的な経験は皆「文化構築物」とはいえ、まさに、そこに「理解」への糸口がある。と捉えることができる。つまり、フィールドにおける全ての経験そのものが、自分と「他者」との相互主観的關係から生まれる「文化構築物」といえる。このように、人間の文化を理解するのに、アプローチの仕方も、医学や物理学などの法則のように、人の意志とは無関係に存在し、誰か「客観的な科学者」がそれを客体化して研究していくものとは異なっている。ギアツも主張したように、その社会そのものについて研究するというよりは、その社会において多様なアイデンティティのあり方を研究するのである (Geertz 1973)。<sup>(7)</sup>

異文化相互理解の動態的プロセス

他者性を形成する要素としてのローカルの概念

自分とは違う「他者／外部の視点」との出会い、そして、そこに相互主観的対話がなされていることを認識することによって、相手の社会事情のみならず、考え方や価値観を理解しつつ、「自分」の文化のことを認識する作業がなされる。この相互主観的なやりとりから生まれる「文化」の認識とは、ラビノーの場合のように、何も民族や国籍による異質性や他者性から生じるだけのものではなく、同じ社会の中で無数のローカルな概念が絡み合い生まれていくものである。ブルデューはフランス人であるが、地方で貧しい家の出身の彼は、パリのエリート層と初め交流しただけのとき、その微妙なアクセントの相違や言葉遣いの差異から、地域差や階層差による、自分自身に内在している文化を認識している。彼はフランスの社会やアルジェリアの社会を描写する際に「ハビトウス」という概念を導入した(Bourdieu 1984, 1977)。これは、日常に存在する無数の差異をもたらす社会的な要素が様々に絡みあい、その社会の人々の中に身体化されているものである。人の身の回りには、大人と子供、老人と若者、資本家と労働者、女性と男性、大屋と店子、高学歴と低学歴、学生と社会人、本家と分家、未婚と既婚、外国人と内国人、など、おびただしい数の差異性を構成するものがあふれている。こうしたもろもろの要素は個々人の間に相対的な差異を生みだしていく。こうした社会的な差異は、性格、生活習慣、言葉遣い、消費行動、衣服、しぐさ、意見表明方法、認識方法などによって、その都度差異が、表現されていく。一見、ちよつとした「ズレ」に見えるものであっても、そこには、社会的に無数に分断されたセルフ(自己)の構成要素が投影され、異なる形でハビトウスが内在化しているのである。例えば、言葉遣いに差異を察知して、そこに、その人にしみついている社会的な要素を再確認するという、彼自身による一瞬の経験は、誰しもが思い当たることである。ここにもまた、こうした「間主観的」な相互関係が形成されていると言える。人と人との間の無数のやりとりから生まれてくる社会的差異の認識は、普段身の回りに限り無く遍在しているのである。異質性や他者性とは、このように、様々な無数の要素から形成され、その都度形を変えて「文化的



に構築されていく。

ブルデューの感じた違和感は、日本でも日本人の文化人類学者によって体験されている。近年出された日本の文化人類学による日本を扱ったエスノグラフィを見ても「文化」の概念を説明する際、そこに様々なズレを見出し、それを異文化として捉えている。佐藤 (1992, Sato 1984) は暴走族というコンテキストで日本文化を描いている。この筆者は、世代や育った社会環境が自分と違っていることや、暴走族の服装、喋り方、車などの運転方法を初め、その行動に「狼狽」や「カルチャーショック」や「違和感」を覚えている。また、小笠原 (1998, Ogasawara 1998) も東京の「OL」を「異文化」と捉え、男性中心的な日本の企業で、いかに「OL」達が自らの意志を主張していくかを描いている。この筆者も、自分は「OL」として働いたことがなかったことを述べ、「OL」であることの意味に「純粋な好奇心」をもって探ることができたと述べている。このように、「外部」の立場を確認することから、それぞれの人々の理解に繋がる記述を始めている。研究の対象となる人々から離れた「外側」の視点で、その人々に語りかけ、問いを発していったのである。日本人による日本人の文化／社会の説明、つまり、同じ民族の内部の多様なセルフのあり方を理解し説明するために、同じ社会でも「違和感」を感じ、そこに問いを発していく。文化を研究するフィールドと呼べる場所は、目の前に展開される人々の生活が不可解、混沌の世界と写るところであれば、どこでもよく、民族性の異なるところである必要はないのである (浜本と浜本1994; 佐藤1992; 関本1988)。

身の回りに「空気」のように存在する「文化」を研究する時、もはや、ベネディクトが研究の正当性を主張した「外側」の眼、あるいは他者性とは、その調査者の国籍などのみによるものでは当然ない。対象となる社会集団やコンテキストにアプローチを加えていく「外部」の視点とは、必ずしも、医療などの自然科学の領域で見られるように、何か一つの決定的なもので対象と切り離されたものではない。確かに、「生まれ」の違いによって「外部者」性が形成されていく。だが、それだけでは、ブルデューが感じた同じ社会の中で生じる違和感というものが説明できない。また、それでは佐藤が当初感じた狼狽や小笠原の疑問から「外部者」性を導き出すことはできない。

ある社会集団やコンテキストを理解するための「外部者」性や「他者」性を形成する要素とは、ベネディクトが想

## 異文化相互理解の動的プロセス

定したほど単純ではない。それは、ローカルなレベルで、違和感として無限に形成されていくものである。自社会の人類学者は、外部の者にはわかりにくい、行動の情緒的な側面を理解するのに有利な位置にあるとされる (Suenari 1992)。そのためには、対象社会の人々から情緒的に「離れて見る」必要がある (Ohnuki-Tierney 1984)。ここで、離れてみる側とは、何も、研究者サイドのみではない。むしろ、対象社会の人々が自らの文化を操作し、フィールドワーカーは“detached observer”と呼ばれるのである (Geertz 1974)。アメリカの文化人類学者であるギアーツは確かにバリ社会においてその「外部者」性を経験しているが、フィールドワーカーとインフォーマントとの間を「切り離す」作業は、インフォーマントからの働きかけによるものでもあることを認識している。同じ国籍であるにもかかわらず、「よそのもの」扱いされることは、日本人研究者からも日本を調査した印象として話題にもちあがることである。ここでも、土地のものと研究者との双方で「ズレ」を形成しあっているとと言える。だが、こうしたズレ、あるいは、お互いにズラしあう関係とは、異文化理解のカギとなりうる「違和感」を生み出していく。ラビノーがモロッコで経験した緊張感、理解に苦しむ心理的葛藤やストレスなどの「違和感」が、自社会の調査をする者にもつきまとうのである。

日本国籍で日本で育った私は、群馬県北部の旅館街の調査の際に経験したものは、まさに、こうしたプロセスであった。「他者性」とはあらかじめ付与された本質的なものではなく、動的に、ローカルの様々な概念によって形成されていったものである (Yoshida 1997)。以下は、旅館業でのフィールドワークからのアネクドットである。旅館の従業員には、離婚をしている者、夫婦や家族関係に問題のある者、生活していく上での金銭上の問題に遭遇し、心に傷を負っている者が多かった。こうした家庭的なことで「過去」を背負い、中には、家庭から逃げ出してきたような者もあり、旅館はそこで働く者達にとっての「駆け込み寺」とも言われていた。そこは、彼女達の接客業という仕事とは、自分達が誇りにしているもので、生きがいの場でもあり、こうした個人的な家庭の状況とは裏腹の関係にあるものであった。幸いこういう家庭内での問題を持っていなかった私の存在そのものが、違和感を彼女達に感じさせる「他者」であり、彼女達の立場にとって「異質」である。彼女達はこうした家庭上の問題や男女関係のしがらみでの感

情的葛藤や悲しみ、あるいは仕事での誇りや苦勞を「笑い」という形に変換させて自らの存在理由を主張する (Yoshida 2001)。彼女達の、旅館という職場で「額に汗して」労働を提供して賃金を得る労働者であるという立場は、代々旅館を営む家の「所有者」である人々とは、一線を画す。一方で、私自身の、財団やアメリカの大学からの金銭的バックアップで研究をしているという存在自体が極めて「異質」で、「他者」とみなされる。旅館を稼業として続ける家庭は学校教育に価値を見出し、高学歴であるのに対し、旅館で「女中」として接客を営む彼女達は必ずしもそうではない。彼女達は日頃の労働の実践こそ人を作る教育であると私に諭す。こうしたコンテクストでも、私は「他者」とされる。また、接客業という仕事の関係上、東京弁を喋るが、本音を自分達で語り合うときは、この土地の方言を使う。この土地特有のイントネーションと言葉遣いを私が知らないことに当然「他者」性を見出し出していた。また、日頃口にはしない、あるいは口には出来ないような旅館業をとりまく政治的な関係、商売上の取り引き関係などがからんでおり、しかも、そうした階層的な関係は脈々と江戸時代から受け継がれているものが多く、そのしがらみに人々は憤懣やる方ない思いを持っている。この土地の人々は、こうした思いを「文化的に規定された形」以外では、言葉にはしない。こうした口にはしない「本音」を、敢えて言葉で語ってほしいとする私は、この土地の常識を知らない「他者」とみなされた。

このように、インフォーマント達は、様々な彼等自身の文化的価値観によって「他者性」を私に附随していったのである。私の立場に関して、様々な形で、私という「他者」との関係を彼等の世界観や社会関係の中で、定義づけていった。ちょうど、モロッコで翻弄されたラビノーに対してそうであったように、この旅館街の人々は巧みに自分達の文化を操作しながら、私とのやりとりの中から「他者性」を私に附随させていったのである。そこには、ベネディクトが想定したような西洋的な概念で規定されているような「客観的」な「外部者」は存在しない。土地の文化概念によって「主観的」に構築された「外部者」がいる。この外部の視点は、あらかじめ付与された「存在という状態 (states of being)」のではなく、相互のやりとりの「行為という状態 (states of doing)」によって文化的に構築されていく (Schneider 1986<sup>(8)</sup>)。インフォーマント達は、私に「他者性」を附随させることにより、私を同じ「自文化」に

## 異文化相互理解の動態的プロセス

所属するという立場には置かなかつた。この私の「他者性」とは、彼等自身のそれぞれの立場の見方や価値観を反映させたものであり、この社会の日常のありかたや感情が絡んだものである。

このように、インフォーマントは、たえず、自分達とは異なっている私の資質や属性やアプローチ、つまり「主観性」を見出し出していた。私のインフォーマントにとっての私の「他者性」の在り方はそれぞれ、人によって様々であったのである。調査者である私自身に附随される「他者性」とは、固定され、あらかじめ規定されているものではなく、フィールドで私が接触していくインフォーマント達とのコンテクストによって、表われては消えていく、変化していくもの、あるいは、インフォーマントと私との間で、その都度「文化的」に構築されていく動態的なものである。国籍、性別、階級、教育といった要素はその一部であり、そうしたものは、インフォーマントによって「他者性」として認められるかどうかは、こうした相互関係の中でその都度「文化的」に確認されていくものである。したがって、「他者性」を構築する要素は無数に存在する。このような「相互主観的」な弁証法的な無数のやりとりから、そこでの文化が見えてきた。つまり、私が「主観的」な「他者」であることを認めた上で、インフォーマント達は、少しずつ自分達自身の「主観的」立場、つまり、文化を説明あるいは確認していった。この「他者性」があるからこそ、こうした「間主観的」なやりとりが可能であり、少しずつ、理解が進んでいったと言える。

## 結論

これまで見てきたように、違和感を感じたところに、自分とはどこか少しづつ異なる多様な文化が横たわっている。「外部者」としての資質を形成させるものは、ローカルな概念に基づき無数に形成される。それらは、人一人一人が、無意識のうちに、あるいは、意図的に、自分の中に吸収したもので、同じ民族や社会の中でも、例えば、世代や階層や性別や教育などによって、多様な形で、相互に関係しあいながら、またときには、抵抗しあいながら、文化資本として構築されていくのである。違和感を感じているところには、自他の間に、時として優劣を構築しようという力関

係が潜むが、それは、「異質」なものとの遭遇により「他者」は自らを主張しなおすという読み替えを行っている。ここには、「客観的」な観察者は存在しない。ポリティカルな要素を含んだ主観的な眼差しへの投げ掛け合いがある。ありとあらゆる「異文化」での経験は、こうした、無数の「他者性」や「差異」を少しづつ違和感として認識するプロセスである。また、それは、様々な形で表現されるアイデンティティの構成要素を確認させられていくプロセスでもある。こうして、その文化の姿が浮かび上がり、そこから、意思ある人々が操作していく文化の論理、意味を再生産していくメカニズムが見えてくるのである。

注

本稿の一部は「自社会研究としての人類学」をテーマにした末成道男氏による研究会において二〇〇一年三月に発表した論文を基にして  
いる。

(1) ハリウッド映画に描かれるステレオタイプの日本人像は、青木(2001)によっても批判的に紹介されている。

(2) 実際、アメリカ合衆国における大学の東アジア・日本研究教育機関を文化分析し、多くの機関におけるオリエンタリズム的色彩の濃いあり方を批判している研究がある (Chow 1993; Yanagisako 1995)。

(3) ボアズの理論的背景はハリス (Harris 1969) を参照。

(4) 地中海沿岸に住むベドウィン社会の女性達の朗詠する詩の研究では、グローバルな視点から、女性であることの文化的な意味を記述し、日常生活の中で、朗詠する詩を通して、日常言葉にすることのできない思い、社会のルール、期待されている役割や責任が女性にとってどういう意味があるかを表現し、社会の一人前の女性としてのアイデンティティを表現している (Abu-Lughod 1986)。更に、この詩には、伝統的な牧畜社会が次第に近代社会に移り行くことに対する反抗の意味がこめられている。スーダン北部のイスラム社会における憑依儀礼やトランス現象を研究では、そこにいかに一人の女性の自我が表現されているかを分析している (Boddy 1989)。妻であることの意味、母になることの意味がどのように男性中心社会とされるイスラムと関係しているかを描写している。

(5) この「声無きものに声を与える」表象の政治的問題点への再帰的批判は一九八〇年代半ばから活発になった (e.g. Clifford and

異文化相互理解の動的プロセス

Marcus 1986; Spivak 1988)。こうした発話のポジションの政治性への批判は、表象のあり方を探る点で有効であろう。だが、こうしたエスノグラフィは、どのようにこうしたオリエンタリズムの言説の対象となってきた人々が自己を表象していくのか、そこに現れているものは何かを、記述している。たとえば、「従属」支配」といったモノロジカルな政治経済的な呪縛を超越しようとする、様々な要素で構築されていく多様なアイデンティティの在り方を映し出そうとする。

(6) この概念は、相手の状態や立場をよく考慮しようとする態度に結びつく。相手の立場や状況を察してやる気遣いは様々なコンテクストにおいて見い出される (H. Geertz 1961)。例えば、家族や親族のものにも向けられる。とくに、食べるのにも困った人がメンバーにいた場合、住まう場所やその他の物的な支援をしてやるということがある。また、親の死にあった場合、ジャワ人の間では、誰が一番困っているか、誰がその財産を得ることによって、救われるか、ということ全員が考えるということが珍しくない。子供を育てるときも、こうしたことを重んじるため、相手のことを察してやるように教育がなされる。行儀などが悪いときに叱る場合は、直接に親が叱るのではなく、間接的に、つまり、他の者からの処罰、悪霊からのたたきがあると言われる。こうした第三者のことを考えさせ、そうした者の感情をさかなでしないようにする。したがって、「適切な行為」とは、回りの人達の視点という認識が生まれる。

(7) 相互に主観的な対話を認識するエスノグラフィでは、例えば、政治経済的な変化の直中にある社会で、その土地の人々の声が反映され、グローバル化の中で、アイデンティティを形成する戦略的機知にたけた姿が浮かび上がる (Marcus & Fisher 1986)。また、グローバルな要素とローカルな伝統的要素を混淆させ新しいものを創造していく「生成の語り」がある (Clifford 1988; 太田1998)。そうしたエスノグラフィでは、よく自分のことを語れない「主観的」存在ではなく、何か法則性などを解明してくれるのを受動的に待つ存在ではなく、自らの意志や思考を、言語を含め様々な媒体で表現できる存在がある。やがて消滅していくあるいはただ欧米化されていくのを待つ存在ではなく、たえず、新しいものを創造していく姿が浮かび上がる。こうした意味産出プロセスで主張されるアイデンティティ形成をレヴィ・ストロースは「流用」あるいは「自分達の利益にかなうように読み替える」ブリコロール (器用人) としている (Levi-Strauss 1962)。ブルデューは実践者の創造性を「戦略」という用語で説明する (Bourdieu ibid)。

(8) "states of doing"と"states of being"はシュナイダー (Schneider 1984) の議論によるもの。彼は、親族組織の研究において、前者のローカルな視点を強調し、いかにその土地の社会関係によって、家族や親族が「文化構築物」として形成されていくかを研究す

るべきものである。』

## 引用文献

Abu-Lughod, Lila

1986 *Veiled Sentiments: Honor and Poetry in a Bedouin Society*. Berkeley: University of California Press.

青木保

一九九〇『日本文化論の変容：戦後日本の文化とアイデンティティ』東京：中央公論社

二〇〇一『異文化理解』東京：岩波書店

Bellah, Robert N.

1957 *Tokugawa Religion: the Values of Pre-Industrial Japan*. Boston: Beacon Press.

ベネディクト・ルース (Ruth Benedict)

一九四八(一九四六)『菊と刀』(長谷川訳)東京：現代教養文庫 (*The Chrysanthemum and the Sword*, Boston: Mifflin.)

Bleier, Ruth

1984 *Science and Gender: A Critique of Biology and its Theories on Women*. New York: Teachers College Press.

Boas, Franz

1898 On Alternating Sound. *American Anthropologist*. 2, 47-53.

Boddy, Janice

1989 *Wombs and Alien Spirits: Women, Men, and the Zar Cult in Northern Sudan*. Wisconsin: University of Wisconsin Press.

Bourdieu, Pierre

1977 *Outline of a Theory of Practice*. New York: Cambridge University Press.

1984 *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*. Cambridge: Harvard University Press.

異文化相互理解の動態的プロセス

- Chow, Rey  
1993 *Writing Diaspora*. Bloomington: Indiana University Press.
- Clifford, James  
1988 *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*. Cambridge: Harvard University Press.
- Clifford, James, and George Marcus, eds.  
1986 *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press.
- Crichton, Michael  
1992 *Rising Sun*. New York: Knopf.
- Fiedler, C. Deborah  
1996a Authoritative Knowledge and Birth Territories in Contemporary Japan. *Medical Anthropology Quarterly*, 10 (2), Pp. 195-212.
- 1996b *Mothers Helping Daughters to Become Mothers: the Socio-cultural Context of Sarogaeri Childbirth in Contemporary Japan*. Ph.D. Dissertation, University of Pittsburgh.
- Geertz, Clifford  
1973 *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books.
- 1983 *Local Knowledge*. New York: Basic Books.
- Geertz, Hildred  
1961 *The Javanese Family: A Study of Kinship and Socialization*. Prospect Heights: Waveland Press.
- Giddens, Anthony  
1990 *The Consequences of Modernity*. London: Polity Press.
- Harris, Marvin  
1968 *The Rise of Anthropological Theory*. New York: Thomas Crowell.



浜本満・浜本まり子編

一九九四『人類学のコンセンサス』東京：学術図書出版社

Hendry, Joy

1995 *Understanding Japanese Society*. London: Routledge.

Keller, Evelyn Fox

1985 *Reflections on Gender and Science*. New Haven: Yale University Press.

Kondo, Dorinne

1990 *Crafting Selves: Power, Gender, and Discourses of Identity in a Japanese Workplace*. Chicago: University of Chicago Press.

1997 *About Face: Performing Race in Fashion and Theater*. Routledge.

Lebra, Takie Sugiyama

1976 *Japanese Patterns of Behavior*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Lebra, Takie Sugiyama

一九九六「日本文化の論理と人間観」『日本文化は異質か』浜口恵俊編 Pp. 216-246. 東京：NHKブックス

レヴィ=ストロース・クロード (Claude Lévi-Strauss)

一九六二『野生の思考』(大橋訳) みすず書房

Lock, Margaret, and Nancy Schepher-Hughes

1987 The Mindful Body. *Medical Anthropology Quarterly*. 1 (1), 6-41.

Lutz, Catherine A.

1988 *Unnatural Emotions: Everyday Sentiments on a Micronesian Atoll & Their challenge to Western Theory*. Chicago: The University of Chicago Press.

Press.

Marcus, George E., and Michael M. J. Fischer

異文化相互理解の動態的プロセス

- 1986 *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in the Human Sciences*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Martin, Emily
- 1987 *The Woman in the Body: A Cultural Analysis of Reproduction*. Boston: Beacon Press.
- Needham, Rodney
- 1972 *Belief, Language and Experience*. Oxford: Basil Blackwell.
- 中根 千枝
- 一九六七 『タテ社会の人間関係』 東京：中央公論
- Ogasawara, Yuko
- 1998 *Office Ladies and Salaried Men: Power, Gender and Work in Japanese Companies*. Berkeley: University of California Press.
- 小笠原 裕子
- 一九九八 『OLたちの〈レジスタンス〉』 東京：中央公論社
- Ohnuki-Tierney, Emiko
- 1984 *Native Anthropologists. American Ethnologist*. 11, 584-586.
- Ong, Aihwa
- 1987 *Spirits of Resistance and Capitalist Discipline: Factory Women in Malaysia*. Albany: State University of New York Press.
- 太田 好信
- 一九九七 『トランスポジションの思想：文化人類学の再想像』 東京：世界思想社
- Rabinow, Paul
- 1977 *Reflections on Fieldwork in Morocco*. Berkeley: University of California Press.
- Sato, Ikuya
- 1992 *Kamikaze Biker: Parody and Anomy in Affluent Japan*. Chicago: The University of Chicago Press.

佐藤 郁哉

一九八四 『暴走族のエスノグラフィ―モードの叛乱と文化の呪縛』 東京：新曜社

一九九二 『フィールドワーク：書を持って街へ出よう』 東京：新陽社

サイド・エドワード (Edward Said)

一九八六(一九七八) 『オリエンタリズム』 今沢訳 東京：平凡社 (*Orientalism*. New York: Pantheon Books.)

Schiebinger, Londa

1989 *The Mind has No Sex: Women in the Origins of Modern Science*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Schneider, David M.

1984 *A Critique of the Study of Kinship*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Schultz, Emily A., and Robert H. Lavenda

1995 *Cultural Anthropology: A Perspective on the Human Condition*. Toronto: Mayfield Publishing Company.

関本 照夫

一九八八 「フィールドワークの認識論」 『文化人類学へのアプローチ』 伊東と米山編 Pp. 263-289. 京都：ミネルヴァ書房

スピヴァック・ガヤトリ・チャクラヴォルティ (Spivak, Gayatri Chakravorty)

一九九八(一九八八) 『サバルタンは語るこゝろがあるか』 上村訳 東京：みすず書房 (Can the Subaltern Speak? In *Marxism and the*

*Interpretation of Culture*. C. Nelson & L. Grossberg eds. Pp. 271-313. University of Illinois Press.)

Strathern, Andrew

1996 *Body Thoughts*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Suenari, Michio

1992 Anthropology of one's own society in East Asia. In *Home Bound: Studies in East Asian Society*. C. Nakane & C. Chiao eds. Pp. 59-79. Tokyo:

The Center for East Asian Cultural Studies.

異文化相互理解の動態的プロセス

Yanagisako, Sylvia

1995 Transforming Orientalism: Gender, Nationality, and Class in Asian American Studies. In *Naturalizing Power: Essays in Feminist Cultural Analysis*. S. Yanagisako & C. Delaney eds. Pp.275-298. New York: Routledge.

Yoshida, Mitsuhiro

1997 *Contesting Powers: A Cultural Analysis of Water Distribution, Personhood, Gender and Ritual in a Japanese Hot Spring Town*. Ph.D. Dissertation, University of Pittsburgh.

1998 The Politics of Ritual Behavior: Resentment, Conflicts, and Hierarchy in a Japanese Hot Spring Town. *Journal of Ritual Studies*. 12 (2), 43-60.

2001 Joking, Gender, Power and Professionalism among Japanese Inn Workers. *Ethnology*. 40 (4), 361-369.